

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03245

研究課題名（和文）小学生の学習適応に関連する幼児期の環境とその支援効果について

研究課題名（英文）Early childhood environment related to learning adaptation of elementary school students and its support effects.

研究代表者

高井 直美（TAKAI, Naomi）

京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授

研究者番号：20268501

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：小学校入学直後の調査から、幼児期の言葉遊び、数遊びや親子の絵本の読み聞かせが、学習の基盤となる言葉や数の基礎知識の形成と関連することが示された。そこで幼児保育での言葉・数遊びや絵本を介した親子の関わりを支援する取り組みを保育所の協力を得て実施した。家庭での絵本の読み聞かせを支援するプログラムは4年間継続し、幼児期を通して絵本への反応が発達し、親子の関わりが絵本を介して促進されることが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1歳児から5歳児の絵本への反応の発達の变化と絵本を介した親子の関わりの変化、さらに親の読み聞かせに関する考えの変化を明らかにした点は、発達心理学的意義を有すると考える。また、地域社会の保育所・こども園の協力のもと絵本の読み聞かせプログラムを作成・実施し、地域での図書館利用を促すなど絵本の読み聞かせの啓発活動の一翼を担うことができたことで、社会的意義もあると考える。

研究成果の概要（英文）：A survey of first grade elementary school students and their parents showed that word games, number games and picture book reading in preschool were useful for basics of learning. With the cooperation of nursery schools, we promoted word games and number games for preschool children and implemented an initiative to support parent-child interaction through picture book reading. The program, which supports children reading picture books at home, continued for four years, and it was found that children's responses to picture books developed throughout early childhood, and that parent-child interaction was promoted through picture books.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児期 言葉遊び 数遊び 絵本の読み聞かせ 子育て支援 学習の基盤

1. 研究開始当初の背景

小学校入学時に、家庭環境や生活環境の問題が主な原因で、学習の基盤形成が不十分である子どもに対して、幼児期から介入的関わりを行うという取り組みは、1960年代よりアメリカのヘッドスタート計画で行われてきたが、日本でも様々な取り組みがなされてきた。2016年度より京都府教育庁は、幼児教育から中学校教育までの学びの連続性・一貫性を通して、困難な状況に置かれている児童生徒を含むすべての子どもたちに、効果のある学校づくり事業を複数のモデル地区に設定して推進してきた。筆者らはその一環で行われた「まなびスタート調査」の分析を担当してきた。「まなびスタート調査」は小学1年生の保護者に入学直後、家庭での経験や日常生活、子育て等についてアンケート調査を行い、児童の国語・算数の学力基盤に係る個別調査との関連について分析を行うものである。筆者らは、幼児期の「アナログ時計を見る」「しりとり遊び」「数遊び」「絵本の読み聞かせ」「テレビ等の時間の制限」等家庭での遊びや子育てのあり方が、児童の言葉や数量概念の形成と関係していることを見出してきた。

2. 研究の目的

本研究は、「まなびスタート調査」の分析を担当した筆者らが、関係地区の協力を得て、小学校教育スタート時点での、保護者への家庭生活や子ども観などについてのアンケート調査と小学1年生の学習の基盤形成との関連を分析すること、の分析を基に、保育所・幼稚園等の現場で、幼児の発達と保護者の関わりを支援し、小学校入学後、効果を検証すること、入学時に、まなびスタート調査を行った児童の、その後の学力追跡調査を行い、縦断的研究から、小学校中学年以降の学力を支えるための基盤を探ること、以上3点の課題について、取り組むことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 2019年度

「まなびスタート調査」実施のモデルとなった取り組みを、約20年前から行ってきた福岡県田川市立金川小学校を訪問し、家庭環境と学習との関連を調べる調査の継続状況や学校での取り組みの成果について聞き取り調査を行った。

「まなびスタート調査」の分析結果から、就学後の学習適応と関連があると推測された、いくつかの遊び経験を、就学前児を対象に促進させることを目指し、1地区の2保育所の協力を得て、5歳児クラスで約1ヶ月間、4つの「遊びプログラム(時計の読み、言葉集め・しりとり、なぞなぞ、数ならべ)」を担任保育士によって実施してもらった。そして、保護者の同意が得られた33名の5歳児に対して、遊びプログラムの前後に、筆者らが1対1で、数、時計、言葉に関する個別課題(プレテスト、ポストテスト)を行って、遊びプログラムの効果を検証した。

同地区の3保育所の協力を得て、1~5歳児までに4週間で4冊ずつの絵本を貸し出す「絵本の読み聞かせプログラム」を試行的に実施した。絵本は筆者らが園と相談し、年齢ごとに選定した。そして、同意が得られた園児117名の保護者に、絵本の読み聞かせについてのアンケート調査を行った。

(2) 2020年度

新型コロナウイルス感染予防のため、前年度に行った「遊びプログラム」での幼児への個別課題を継続することは困難となった。したがって「遊びプログラム」は前年度の実施を踏まえ、各園で任意に保育に取り入れてもらうことにし、研究としての継続は行わなかった。

一方、「絵本の読み聞かせプログラム」は、家庭での調査であるため、コロナ禍での実施が可能で、また前年度に行った同プログラムが、保護者や幼児の絵本への意識が高まることが示され、園からも継続の要望が出されたため、対象者を増やし2地区4園(3保育所、1こども園)で実施した。前年度と同様に、研究参加に同意が得られた1歳から5歳児とその保護者288組を対象とし、4週間で4冊の絵本の貸出と保護者アンケート調査を実施した。アンケートの様式は、結果を数量化しやすいように、前年度の実施を踏まえて選択回答式を多く取り入れて改訂した。

(3) 2021年度

「絵本の読み聞かせプログラム」はそれまでに実施した園からは継続の希望が出され、さらに同地区で参加の要望が1園から出されたため、対象園を2地区5園(3保育所、2こども園)に拡大し、379組の園児と保護者に、2020年度と同様の絵本プログラムを実施した。2020年度とアンケート項目は同じであるが、園によっては保護者に指定絵本の中から読む絵本を選ぶ、選択制を導入したため、使用する絵本の種類が増加し、絵本による違いについて分析することとした。

(4) 2022年度

4年目となった「家庭での絵本の読み聞かせプログラム」の参加園は前年度よりさらに1園増え2地区6園(3保育所、3こども園)となり、2地区にあるすべての園が参加することとなった。プログラムには、保護者の同意が得られた園児と保護者計458組が参加した。これまでと同様にアンケートを実施したが、従来の質問に加えて本プログラム参加の効果を調べるため、親にとってのプログラムの参加年数(1~4)を尋ね、さらに親が考える絵本の読み聞かせに対する意

義についても尋ね、読み聞かせ時の子どもの反応との関連を調べることにした。

(5) 2023 年度

「絵本の読み聞かせプログラム」研究の成果を地域社会での子育て支援に役立ててもらうことを目的とした絵本の紹介小冊子を作成し、研究協力地域および「まなびスタート調査」関係地域で配布し、地域の子育て支援に役立ててもらうことを計画した。

4. 研究成果

(1) 2019 年度

金川小学校では、当時の担当教員を含めた 2 名の教員にインタビュー調査を行った。インタビューで語られた内容から、「家庭環境と子どもの学習との関係を調査しそこで見出した関係を、子どもたちとその親に『楽しい親子遊び』として還元してきた」ことが、調査の継続につながったことを知った。また就学前実態調査相関表から、子どもの学力と関りが深いこととしてわかった家庭での経験は、「A 基本的な生活習慣、B 言葉や数にふれる体験・環境、C 約束やきまりを守る子に、D 相手の話を聞く力」であり、それを保護者や保育所へも、伝えてきたとのことだった。

この聞き取り調査から、本研究も研究成果を最終的には保護者や子ども達の支援に活かすことに意義があると感じ、研究が目指す目標を持つこととなった。

保護者の同意が得られた 33 名の 5 歳児に対して、保育で行われた「遊びプログラム」の前後に個別調査を行った。1ヶ月の「時計の読み、言葉集め・しりとり、なぞなぞ、数ならべ」を取り入れた保育の結果、個別調査では「数カードの並べる速度が増す、時計の読みが正確になっていく、しりとりの語の連鎖が増える、なぞなぞの正答率が高まる」など、遊びプログラムの前後で、保育の効果が認められた。また「絵本の読み聞かせプログラム」では、アンケート調査の結果、どの年齢の幼児にも絵本への興味の増加や親子のコミュニケーションの促進など、読み聞かせの効果がみられることが示された。

以下の図 1～3 は、「遊びプログラム」について 2021 年 3 月の日本発達心理学会で、オンラインのポスター発表（引用文献）で発表した際の要約となるサムネイルであり、発表では、それぞれの遊びプログラムの意義を研究者間で議論することを通して、今後の発展の可能性を検討することができた。

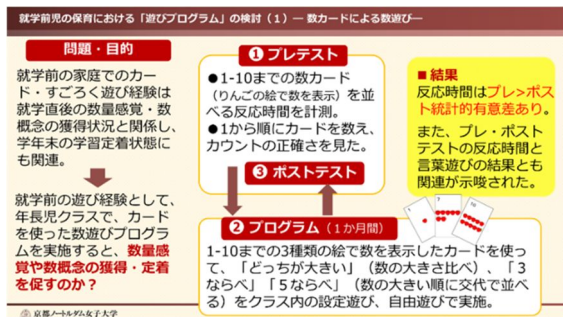


図 1 数カードによる数遊び（引用文献）

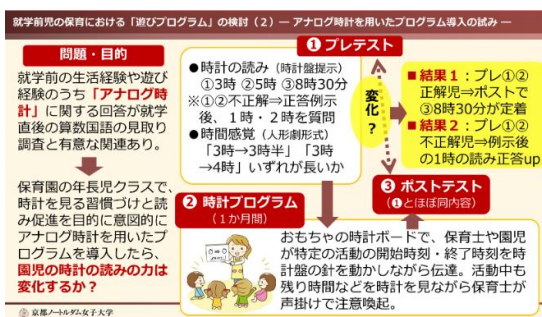


図 2 アナログ時計を用いたプログラム（引用文献）

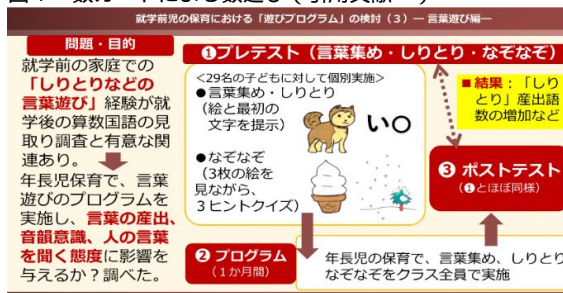


図 3 「しりとり」「なぞなぞ」言葉遊びの試み（引用文献）

(2) 2020 年度

2020 年度に行った「絵本の読み聞かせプログラム」の分析結果は、2019 年度と同プログラムの予備研究と合わせて、引用文献にまとめ、「保育学研究 60 巻」の特集論文（保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み 地域レベルの試みに焦点を当てて）に 2022 年度に掲載された（引用文献）。結果の分析から、図 4 に示したように、読み聞かせを習慣としていた「事前多群」と習慣としていなかった「事前少群」の特徴の違い（子どもが絵本に対して「感想質問」をするのが「事前多群」に多いことなど）や、年齢による絵本への反応の違い（「言葉真似」や「手体反応」は年齢の低い幼児に多く見られ、「文字数字」への反応は年齢の高い幼児に多いこと）などが明らかになった。また、図 5 に示したように、「絵本の読み聞かせプログラム」を経験した後、年齢によって様々な変化、支援効果がみられることが、明らかとなった。特に、「親子の関わりが増えた」「親に読んでと要求することが増えた」「親の絵本への興味が増えた」

と変化を報告したのは、2歳児の保護者に多く見られ、5歳児には「変化なし」が比較的多かったことから、幼児期前半からの介入が有効であることが示唆された。

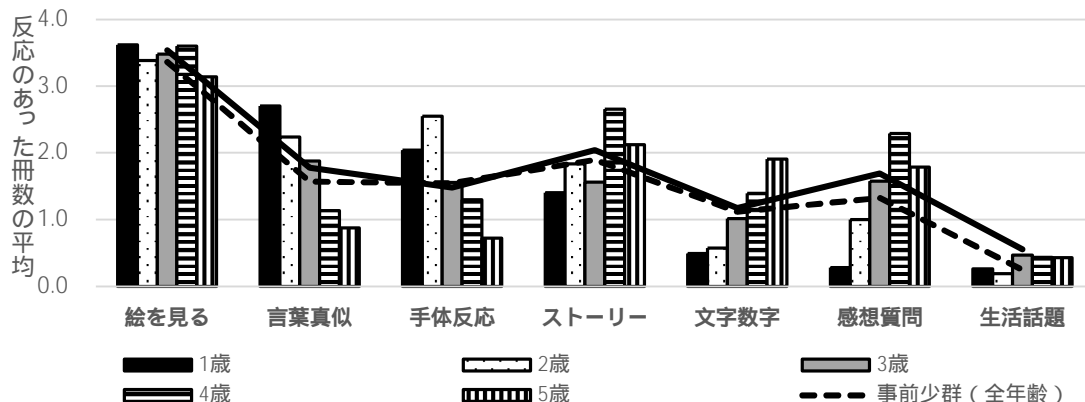


図4 事前頻度と年齢別子どもの絵本への反応

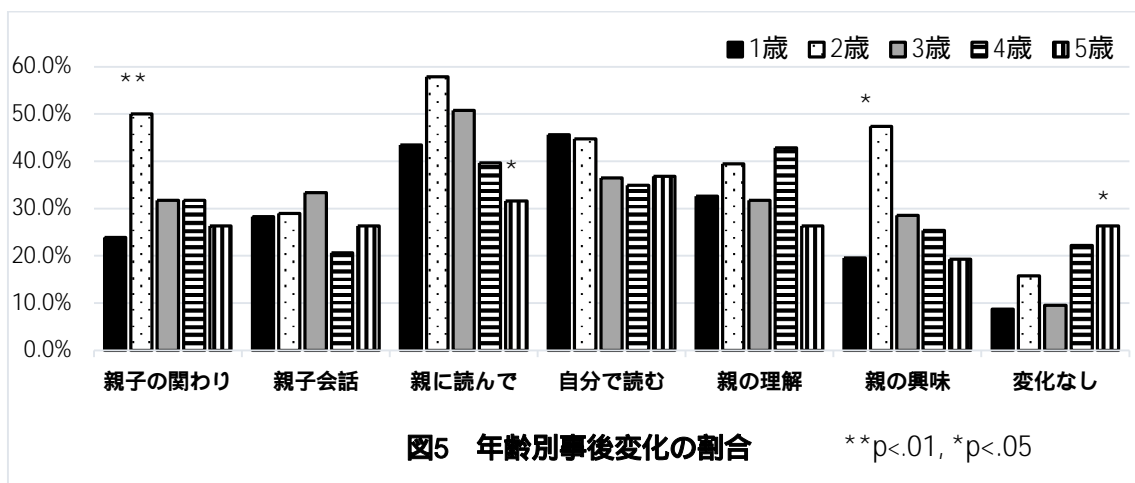


図5 年齢別事後変化の割合 **p<.01, *p<.05

(3) 2021年度

2021年度には2020年度と同様の絵本プログラムを実施した。前年度と同様の支援効果(子どもと保護者との関わりや子ども・保護者の絵本への興味の増加等)が再現されたことに加え、使用絵本の種類を拡大したことから、絵本によって特徴的な、各年齢児の反応も明らかとなってきた。2021年のプログラムでは、絵本差の分析を試みたため、その成果を「京都ノートルダム女子大学研究紀要53巻」に執筆した(引用文献)。結果では、絵本による子どもの反応の違いが3歳以降明確になっていくことが示された。図6は2歳児、図7は3歳児の数冊の絵本への反応の違いを示す図であるが、2歳児に比べて3歳児の方が、絵本の違いに対して、幼児の示す反応が分化している傾向が窺える。

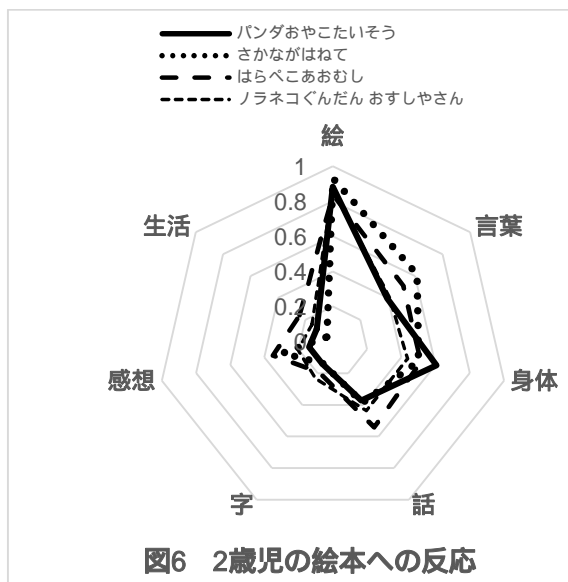


図6 2歳児の絵本への反応

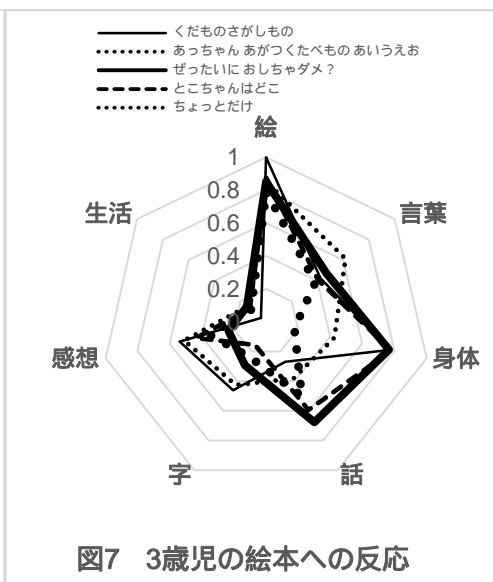


図7 3歳児の絵本への反応

また 2021 年度のデータに関して、2023 年 3 月に行われた日本発達心理学会第 34 回大会において 3 本のポスター発表を行った（引用文献 ）。ポスター発表では、幼児の年齢、読み聞かせの状況、絵本の種類によって、幼児の反応が異なる様子を詳細に示した。

(4) 2022 年度

「絵本の読み聞かせプログラム」は 4 年目で最終となり、親に対して参加年数（1～4 年）を尋ねたが、参加年数と親子で図書館に行く頻度が多くなると図書館に行く頻度も高まる有意な正の相関がみられたことから、本プログラムが親子の絵本への関心を引き出す長期的効果があることが示唆された。また絵本の読み聞かせについての親の意義については、主成分分析の結果から 2 成分が見出され子どもの絵本への反応と親の考える読み聞かせの意義の間に連関がみられること等が分かった。これらの分析結果は論文にまとめ、学会誌への投稿を行う予定である。

(5) 2023 年度

2019 年度から 2022 年度の 4 年間に行った絵本の読み聞かせのプログラムで用いた絵本の中から、一般の親子に推薦する 43 冊の絵本を紹介する 56 頁の小冊子を作成した。この小冊子は、研究に協力した園の教職員、保護者、並びに関係地域の園・校の教職員、保護者、教育委員会、図書館などに無料で配布し、地域における家庭での絵本の読み聞かせの推進に役立ててもらうことを企図したものである。一般の絵本の紹介冊子とは異なった点は、絵本に対する子どもの反応を基に各絵本の特徴をレーダーチャートに示した図を載せて絵本の分類を試みたこと、また保護者の感想を抜粋して絵本を介した親子の関わりの特徴を示したことにある。絵本の分類は、「1 感覚で味わう」「2 やりとりを楽しむ」「3 想像をはぐくむ」「4 文字・数字・言葉で遊ぶ」の 4 つであり、親子の読み聞かせ体験のデータから分類した点が特徴的である。絵本によって、また幼児の興味によって多様な楽しみ方があることを紹介した。冊子は 2000 部印刷し配布した。

(6) 当初の予定からの変更点と予測しなかった成果

研究課題申請時の目的では、幼児期の発達支援を行うことが小学校の学習にどのような効果を及ぼすかについての検証を含んでいた。つまり発達支援は、就学前の 5 歳児と就学後の幼小接続以降に焦点を当てる予定であった。初年度の 2019 年では、5 歳児の保育において「遊びプログラム」に関して個別調査を行い、1 ヶ月の短期効果を検証することができたが、コロナ禍の影響もあり、その後個別調査の継続を断念することとなり長期効果の検証はできなかった。

一方、試行的に 2019 年度に開始した 1 歳児から 5 歳児の「絵本の読み聞かせプログラム」は、研究協力園や参加保護者からの継続要望が出され、対象園の増加にもつながった。そして、就学前児だけでなく幼児期初期の 1、2 歳児にとっても、親子の関わりや子どもの発達を推進する意味のある取り組みと受け入れられ、研究は 1 歳児から 5 歳児までの発達の变化に伴う絵本を介した親子の関わりに焦点を当てることになった。さらに、研究の成果を研究協力園の地域に還元する過程で、地域の小学校および教育委員会でも、幼児期の絵本活動の意義を理解していくきっかけになったと考えられる。

予測しなかった成果としては、本研究には直接関与しなかったが、筆者らが「まなびスタート調査」に関わっている複数の地域の教育関係者や幼児の保護者に、絵本紹介の小冊子を配布したり、「絵本の読み聞かせプログラム」で見出された親子の関わりと子どもへの影響を解説したりすることで、幼児期からの絵本を介した関わりを支援することが、子どもの認知機能、非認知機能の育成に関わるという意義を広く感じてもらうきっかけになったことが挙げられる。今後、家庭、保幼小のみならず、地域の図書館なども含む地域社会が一体となり、幼児期から就学後をつなぐ子どもの健やかな育成を支援する取り組みの継続が望まれる。

<引用文献>

- 薦田未央・高井直美・伊藤一美 2021 就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討
(1) 数カードによる数選び 日本発達心理学会第 32 回大会 29PM2-3A-PS1
- 伊藤一美・高井直美・薦田未央 2021 就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討
(2) アナログ時計を用いたプログラム導入の試み 日本発達心理学会第 32 回大会 29PM2-3A-PS2
- 高井直美・薦田未央・伊藤一美 2021 就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討
(3) 「しりとりに(言葉集めを含む)」「なぞなぞ」による言葉遊びの試み 日本発達心理学会第 32 回大会 29PM2-3A-PS3
- 高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子 2022 幼児の家庭における絵本の読み聞かせプログラムの効果 保育学研究, 60, 391-402. 10.20617/reccej.60.3_11
- 高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子 2023 家庭における絵本の読み聞かせへの幼児の反応 1 歳から 5 歳の発達の变化 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 53, 91-104.
- 高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子 2023 幼児の家庭における絵本との関わり(1) 絵本読みの状況と幼児の反応との関連 日本発達心理学会第 34 回大会 3PM1-P-PS14
- 薦田未央・高井直美・伊藤一美・塘利枝子 2023 幼児の家庭における絵本との関わり(2) 1～3 歳児における絵本への反応の発達の变化 日本発達心理学会第 34 回大会 3PM1-P-PS15
- 伊藤一美・高井直美・薦田未央・塘利枝子 2023 幼児の家庭における絵本との関わり(3) 4～5 歳児における絵本読みの状況と幼児の反応 日本発達心理学会第 34 回大会 3PM1-P-PS16

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子	4. 巻 60
2. 論文標題 幼児の家庭における絵本の読み聞かせプログラムの効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 391-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.60.3_11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子	4. 巻 53
2. 論文標題 家庭における絵本の読み聞かせへの幼児の反応 1歳から5歳の発達的变化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都ノートルダム女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高井直美・薦田未央・伊藤一美・塘利枝子
2. 発表標題 幼児の家庭における絵本との関わり（1）絵本読みの状況と幼児の反応との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 薦田未央・高井直美・伊藤一美・塘利枝子
2. 発表標題 幼児の家庭における絵本との関わり（2）1～3歳児における絵本への反応の発達的变化
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤一美・高井直美・薦田未央・塘利枝子
2. 発表標題 幼児の家庭における絵本との関わり(3)4~5歳児における絵本読みの状況と幼児の反応
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 薦田未央・高井直美・伊藤一美
2. 発表標題 就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討(1)数カードによる数遊び
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤一美・高井直美・薦田未央
2. 発表標題 就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討(2)アナログ時計を用いたプログラム導入の試み
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高井直美・薦田未央・伊藤一美
2. 発表標題 就学前児の保育における「遊びプログラム」の検討(3)「しりとり(言葉集めを含む)」「なぞなぞ」による言葉遊びの試み
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	塘 利枝子 (TOMO Rieko) (00300335)	同志社女子大学・現代社会学部・教授 (34311)	
研究分担者	伊藤 一美 (ITOU Kazumi) (30329974)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授 (34312)	
研究分担者	薦田 未央 (KOMODA Mio) (40411102)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授 (34312)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------